



トラック一杯の救援物資を持って名古屋からやってきたウェイン・ジャクソン。元スーパーヘビー級のボクサーだ。そのパワーは、会う人すべてに勇気を与えた。



神奈川県で障害者のケアワーカーをしていた加藤敦さんは、個人参加のボランティアだ。ボランティアは、若い力を存分に発揮できる機会だという(石巻市湊町にて)。

# power

# from

# the people

未曾有の大災害に見舞われた東北地方は、瞬間に日本中の注目の的となった。そして今、世界の目は再び日本に向けられている。大規模で高度な復旧作業が進む中、自費で支援しようと立ち上

がる人々も増えている。安全で快適な生活を自ら捨てて、被災した人々に尽くそうと集まるボランティアたちだ。そんな彼らと石巻で活動した僕は、人間についていろいろと考えさせられた。



文●スティーブ・ジャービス(本誌編集部)

photographs by Go Nakamura (P108-109) & Steve Jarvis  
text by Steve Jarvis translation by Junsuke Tokano

# people



助けるのも、本能。



世界は数秒で変わる。

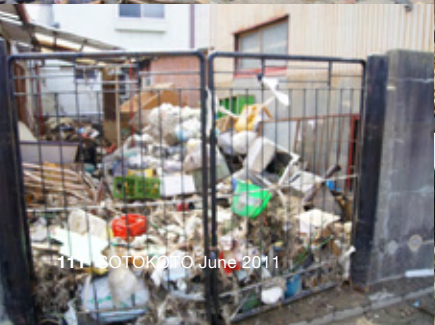


**見ているだけなんて、耐えられない!**

3月11日、築地の編集部も激しい揺れに襲われた。机の下から這い出ると、オフィスはひどいありさまだった。すぐにテレビをつけると、沿岸に押し寄せる巨大な「水の壁」が目飛び込んできた。事態がとてつもなく重大であることは明らかだった。日が暮れる頃、友人の故郷が火の海と化していた。「わだかまり」ができたのはこの時だ。その後数週間つきまとったこのわだかまりは、不安や恐怖によるものではなく、悲劇を眺めるだけの自分に対するものだった。「何かできることをしなければ」という義務感が、心の奥底から湧き出していた。仕事に追われて動けない自分への苛立ちは、募る一方だった。



震災発生から3週間後、ようやく仕事も一段落した。これで東北へ向かえる。深い悲しみに暮れる人々に、自分の持てるすべての力を捧げようと思った。彼らの負担を少しでも減らし、「一人じゃない」ことを行動で示すことで、苦しみを和らげようと思った。被災地で1週間過ごすとも心も体も疲れ切ったが、わだかまりも消えていた。そして、専修大学石巻キャンパスのボランティアセンターに集まった何千人もの人々を駆り立てた、無私な心、温かさ、団結力に、感服せずにいらなかった。



# みんなの力を信じたい。

**苦しむ人々のために、自分を捨てるという行為。**  
被災地での活動を終え、心身ともに疲れ切った僕は、いざという時に助け合う性質が人間の奥底に眠っていることを実感していた。だがそれは、今回の震災のような悲劇が起きない限りは目覚めないことが多いのだ。



ブログは屋外で書き、夜は車内で眠った。それでも石巻を去る時は、後ろ髪を引かれる思いだった。ボランティアたちの活気と、人を助ける喜びをもっと味わいたかった。  
<http://www.sotobora.net/>

**僕** はまず、被災地の状況を知るためにNGO「ピースボート」のボランティア説明会に参加した。この団体は宮城県石巻市を支援活動の場として選んでいた。説明会冒頭から、彼らのプロ意識の高さと真摯な姿勢に深い感銘を覚えた。特に印象的だったのは、被災地の人々との絆を深めることに重点を置いていたことだ。情報を整理し、彼らの姿勢を見習い、僕は一人で石巻に向かった。石巻に着き個人でボランティアを行った後、ピースボートの活動にも参加した。独特のニオイが立ち込める中津波に襲われた建物から泥をすくい出す作業を行った。きつい作業だったが、ボランティア同士そして住民との一体感が生まれた。現地のボランティアセンターを拠点としてほかにも数多くの団体が集まり、無数の個人ボランティアたちもいた。そこに

るすべての人々が、壊滅的なダメージを受けた人々の生活の場を再生するため、積極的かつ繊細に日々の活動に取り組んでいた。**ボランティアセンターとボランティアたち。**  
現地のボランティアセンターは、大きく2つのセクションに分かれていた。一つはNGOやその他の団体の現地での活動を監視するセクション。もう一つはボランティアを熟望して独力で石巻にやってきた個人や小規模グループに対応するセクションだ。双方とも、支援ニーズと人員をマッチングさせる機能を持っている。必要な作業をリンク付けて、それに合わせてボランティア人員を配置するというものだ。主催者やNGOの代表者らによる会議が毎晩行われ、そこでニーズや資源が評価され、翌日の任

務が割り振られる。活動全体の規模や、決定・調整のスムーズさが見えてきたのは、センターで2日ほど過ごしてからだった。僕は、ただ感服するばかりだった。わずか3週間で、数十件の団体がボランティアセンターと協働し、4000人以上がボランティア登録し、グループに振り分けられ、1800種類もの作業を行っていたのだ。もちろん全てが完璧に行われたわけではないだろう。有効に使われずじまいのスキルもあつたかもしれないし、大事な作業が見落とされることもあつただろう。だが、被害の規模や問題の複雑さを考えると「素晴らしい」の一言に尽きると思う。

現地では、多くのボランティアたちと知り合い、語り合うことができた。何を思い、どうやって生きてきたか、そしてなぜ石巻に来たのかを聞いて深く感動することも多かった。彼らほとんどは、普通の人だった。ただ「被災地の人々に役立ちたい」「何かを変えたい」という思いの強さが普通ではなかったのだ。例えば、アメリカ人のクレイグ・ボストロイドは、カリブ海でパカンスを楽しんでいるはずだった。震災が起ると、彼は急遽それをキャンセルし、1週間後には日本にいた。日本は初めてで、

何の経験も知識もなく、もちろん言葉もわからない。持っていたのは「助けたい」という強い気持ちだけだった。何とか石巻に辿りついた彼は、あるチームに加わり、避難所として使われる小学校の修復作業に参加していた。ただ助けたいという気持ちから多くの人々の人生に触れ、自分自身の人生も大きく変わることになったのだ。元ボクサーのウェイン・ジャクソンは、名古屋に住むカナダ人だ。名古屋で義援金と救済物資を集め、トラックとパワースショベルをレンタルしたウェインは、被害の大きかった地域で民家に通じる道路から瓦礫を撤去する作業を行っていた。フランス人旅行者のジョンソンは、来日してわずか数日後にはピースボートの国際ボランティアチームの一員として泥まみれ作業をしていた。(人々との出会いについては、ソトコトのウェブサイトを「ソトボラ」をご覧ください)  
**主役はやはり、日本人。**  
3月11日に日本を襲った大災害は、世界中の注目を集めた。各国が哀悼の念を示し、関心を寄せ、あらゆる国々があらゆる支援を行っている。そして、日本人の品格、自制心、精神的な強さには、世界中が驚嘆し



東北の春は寒く、強風も吹きつける。風呂も電気もない上に、食料も寝床も自前だ。そんな中での重労働の日々だったが、専修大学の災害ボランティアセンターは活気にあふれていた。ボランティア同士の交流も盛んだ。個人であれ、団体からの派遣であれ、泥まみれの作業や長時間の炊き出しを引き受けようという人には山ほど仕事がある。参加するなら、今からでもまだ遅くない。



石巻でのボランティア活動は、フレキシブルで効果的。

①石巻市災害ボランティアセンター事務局長の大槻英夫さんは、被災者側のニーズに合わせて派遣するボランティアを決める作業を監督している。ボランティアの多くは個人や少人数グループで、7割以上が県外の人々だ。期間は日帰りからOK。ボランティア保険等の詳細は、下のウェブサイトで確認してほしい。ボランティアのほとんどは日本人だが、②名古屋からきたカナダ人のウェイン・ジャクソンや、③アメリカ人のクレイグ・ボストロイドなど、外国人にも出会った。その誰もが、活動の重要性を自覚し、来られなかった人たちの分まで働くことを使命としていた。

<http://www.camper.ne.jp/npo/ishinomaki/>



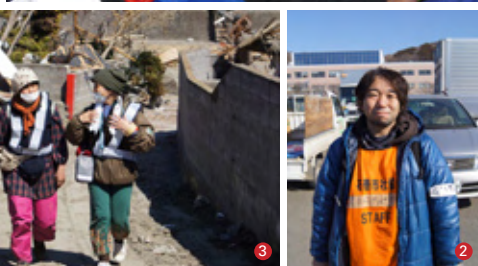
復興を緑の下で支える、ボランティア団体の活躍。

被災地での支援活動には多くの国内NGOが携わり、個人の協力も募っている。「ピースボート」は最大規模のNGOの一つで、設立以来28年間、世界中の災害地域で活動してきた。今回は石巻に拠点を置き、建物から泥やがれきを取り除く作業と、被災者のための毎日1500食分の炊き出しを行っている。ボランティアの中には、外国人の顔も見られた。僕以外にも、①イギリス人の英語教師のロブ、②ベトナム人の大学院生のティム、③グループ・リーダーの但木雄大さん、そして④アルゼンチン人のタンゴの先生、ラロがいた。  
<http://www.peaceboat.org/>



### 草の根のグループが各地で誕生。様々な支援活動へ。

震災発生後、日本各地で様々な草の根の支援グループが誕生した。①②③④「鎌倉とどけ隊」(P143参照)もその一つだ。こうした数多くのグループが、炊き出しやヘアカットからエンターテインメントにいたるまで、様々な支援活動に時間とお金と労力を捧げている。その大多数が、職場の同僚や友人同士など、仲間内のインフォーマルなグループだ。小規模で無名のグループがほとんどだが、被災者に役立ちたいという気持ちは同じだ。毎日を共に過ごす仲間たちが共通の目的の下で団結し、活動することで彼らの絆も深まる。そして被災地の人々との新たな友情も生まれるのだ。



### 救急医療から心のケアまで、医療ボランティアは大忙し。

病院が流された地域での診療活動、震災で孤立した地域への訪問など、医療ボランティアは様々なレベルで被災者を支援している。自衛隊などの大規模な支援活動の手が届かない部分では、小規模のボランティア・チームやNGOが自主的に対応しており、①米田きよしさん(右)のチームもその一つだ。②看護師や介護士らとチームを結成した米田さんは、孤立して診療を受けられない被災者を個別に訪問し、診察等を行っている。また、長期的には③掛井一徳さんのような児童心理の専門家のケアも重要だ。被災地の子供たちにはあらゆる心のケアが必要なのだ。



ボランティアの最も大事な役割の一つは、被災者の人々と触れ合うこと。ほんのひと時も苦しみを忘れてもらうことだ。各被災者を訪れる医療チームは、薬を届けるなどの医療サービスと同時に、心を開いて誰かと重荷を分かち合う機会も提供している。活動内容は異なるが、全国から集まるボランティアたちも炊き出しなどを通して被災者たちとの心の触れ合いを実現している。



た。外国人である僕としては、原発事故の影響を懸念して日本を逃げ出す外国人が多い中、日本人を助けようと団結する仲間の外国人たちに焦点を当てたいところだ。しかし僕は、被災地でそれ以上に大事なことに気づかされた。ここではそれを語らねばなるまい。石巻訪問を通して最も深い感銘を受けたのは、僕の第二の故郷である日本が、未曾有の大災害に見舞われたにもかかわらず、ほとんど自力で立ち直ろうとしているということだった。これまで不備な点や誤った対応もあったし、犠牲者のお墓など未解決の問題もある。しかし、この見事な自助能力は大いに誇るべきだと思う。

現地の人々や自衛隊、公務員や各企業の社員の方々の苦勞を考えると、ボランティア活動のみに焦点を当てるのは筋違いかもしれない。しかし「そこにはできることがあるから」というただそれだけの理由で、助けずにいられない人々のための場所が、そこにはあるのだ。僕は、ボランティアセンタリーで出会った人々の「無私の心」と「自己犠牲の精神」に深い感動を覚えた。彼らが、電気も風呂もない生活は覚悟の上で、食料などを持参して自費で被災地に赴いたことは、いまでもない。この過酷な条件とは裏腹に、エゴを超越した共感と互いを思いやる純粋な気持ち、ボランティアセンタリーだけでなく、地域全体を包んでいた。

また、出会ったボランティアの大部分は若い人々で、大学生が多かった。彼らの情熱やエネルギー、そして被災した人々の心情や境遇を深く思いやる心には感服させられた。彼らは、自分の世界に浸る身勝手なオタクだとか、流行ばかり追いかけているといった現代の若者のイメージとは、おおよそかけ離れていた。厳しい環境と最低限の設備。そして日々の過酷な労働にも喜んで耐える、知的で、大人で、心温かい若者たちだった。多くの人々が日本の将来を懸念

「無私の心」「団結」「調和」に満ちた雰囲気には、誰もが引き込まれることだろう。しかし、まだまだ克服すべき課題が多くあることを心に留めておくほうが賢明だ。物理的な復旧やその効果には明確な尺度があるし、必要な物的・人的資源も日本には十分ある。しかし、東北地方が今後直面する最も重要な課題は、社会的弱者へのサポートや心のケアといった、目に見えない問題な



上左/「遠い国からありがとう」と言ってくれる人々は、僕が東京に住んでいることを知って驚いていた。上右/あちこちに応援メッセージが。下左/そして悲しくなる光景も……。下右/医療チームと行動を共にすることで、多くの人々が身体や心へのダメージを抱えていることを知った。

害のような極限状態に置かれられない限り、自分のカラを打ち破り、よりよい自分へと進化することができないように思える。

僕が石巻のボランティアセンタリーで実感した、共通の目的に向かう人々の団結力は、「他者の悲劇を目の当たりにした人間は、喜んで自分の我を捨て、ただその他者のために尽くす」という僕の信念を、再認識させてくれた。

世界では、ありとあらゆる危機が次々に発生している。やがて各国メディアの注目も必然的にほかへと移ってゆくだろう。国内のメディアも同じだ。しかし、それは阻止しなければならぬ。破壊された東北地方にある課題は、復旧だけではない。社会が個人に与えられるもの、そして毎日を共にする人々との関係性を再定義すべき時でもあるのだ。国籍や言語、個人の好みに違いはあっても、私たち人間は、私たちが思う以上に素晴らしい生き物なのだ。ただ悲しいことに、災害の

被災地を訪れる意味。

修学旅行で広島を訪れることで人生観が変わる日本人がいるが、若い人々にはぜひ東北も訪れてほしい。そして、震災がこの地方をどれほど悲惨な状況に陥れたのかを、もっとよく知ってほしい。日本のような豊かな国では、日常生活は外界と一線を画し、消毒され、抗菌加工されている。そんな中で、地球上の大多数の人々が経験している過酷な日々を理解することは不可能に近い。今回の震災で命を落とした1万人以上の人々と自分を置き換える勇気があれば、中東などで続く戦争で何十万という命が失われている事実がたい痛みを感じるはずだ。そして、災害というものの本質が何なのか、どういう対処が可能なのかを、深く考えることになるだろう。

石巻での心の触れ合いのお陰で、僕はまったく知らない人々との「つながり」を得ることができた。それは「人間は不幸に見舞われた人々のために何かをすることができ、すべきである」という信念、そして善意によるつながりだ。当たり前のように安全に過ごし、自分はこうありたいだとか、人生はこんなはずだとか、そうした期待を膨らませて、そうはいかない現実に失望しても、気の向くままに好きなことを追いかけて、そこから逃避できる。そんな毎日生きられる僕たちは、本当に恵まれているのだ。被災地に、自分を捨てて他人に尽くし、プラスの方向への変化の一部を担いたいと思う人々が大勢いることを知り、希望が湧いてきた。苦しむ人々のために自分を捨てて尽くすことで、それを受ける人間のみならず、与える側の人生も変わることがある。人間とは本来、そういう生き物なのだ。僕が石巻で見たのは、答えが必ず「プラス」になる方程式だった。読者の皆さんも、ぜひその目で確かめて来てほしい。